1　研究主題

主体的に学ぶ児童の育成 ～**学ぶ意欲**を育む国語科授業づくりを通して～

2　主題設定の理由

平成 29 年告示の学習指導要領においては、社会の大きな変化に対応しながらよりよく生きる人間を育成することが志向されている。国語科においても他教科と同様に、育成すべき資質・能力が「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の 3 つに整理された。これらの「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」の育成において大きな原動力となるのが「学びに向かう力、人間性等」である。

本校では、平成 29 年度から自分の考えを確かに表現できる児童の育成を目指し、国語科「書く活動」を通して授業実践を重ねてきた。「モデル文」の提示という指導方法を重点的に工夫してきた結果、活動のゴールをイメージさせることができ、児童に「できそう」という意欲を喚起させ、さらに、見通しを持って学習に取り組めるようになってきた。しかし、平成３１年度全国学力・学習状況調査児童質問紙、同年度１月実施の CRT では、「関心・意欲」の面が県及び全国平均を下回る結果であった。また、教員対象の質問紙においても、「調査対象の児童は、熱意をもって勉強していると思いますか」「児童は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分で取り組む事ができると思いますか」という項目に対し、両方共に「どちらかといえば、そう思わない」と答えた割合が最も高くなっていた。

そこで、これまでの研究成果を生かしながら、令和２年度より「主体的に学ぶ児童の育成」を目指して、児童が教師の問いに答える受動的な学習から転換するべく、児童が能動的に学習に向かう授業の在り方を探究してきた。１年次は、「資質・能力」「思考操作」「言語活動」を組み合わせた学習課題を基に、児童の学ぶ意欲を高める単元構成の工夫と主体的な学びを引き出す指導方法の工夫の 2 つの視点を持って研究を進め、児童自身が学習に対する課題を理解し、見通しをもって活動に取り組める授業づくりの必要性を再確認することができた。

本年度は、研究主題「主体的に学ぶ児童の育成（２年次）」とし、１年次の成果と課題を踏まえ、児童が主体的に取り組むことができる授業づくり、及びその具体的な手立てに焦点を置いた研究を進めていく。この研究の成果によって、他教科においても児童がその力を発揮していけることを期待している。

3　研究の主題について

本校の考える「主体的に学ぶ児童の姿」

学習課題を理解し、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学びをふり返りながら学んだ力を発揮することができる児童。

(1) 学習課題

《学習課題》とは、単元を通してどのような言語活動を通して、どのような思考を働かせ、どのような力を習得できるようになるのか示したものである。「何のために学ぶのから、何ができるようになるのか」について児童が、単元のゴールの姿を見通すための手立ての 1 つである。学習指導要領の考え方では、「主体的な学び」の実現には、「見通しを持って」取り組む必要があると

示されている。本単元で身につけることができる「資質・能力」と、その力に向かわせるために必要な「思考操作」、そして、魅力ある「言語活動」を盛り込んだ《学習課題》を提示することで、児童自らがその単元で身につける力や、思考の方法を意識しながら見通しをもって学習に向かうことができる。教師が言語活動モデルを示すことで、児童は、「やってみたい」「学びがいがありそう」という意欲を持って学習に取り組み、学習後には「自分でできた」という実感、そして、「身に付けた力を生活にも生かしたい」という意欲を高めることができると考える。

また、《学習課題》の作成・提示は、教師にとっても指導の目的が明確になり、具体的な授業の構想を持つことのみならず、より明確な「学習指導」と「学習評価」の一体化を測ることが期待される。

(2) 見通しを持つ

児童が見通しをもって学習に取り組めるようにするためには、単元の導入時に言語活動モデルを示すことが有効であると考える。単元を通した言語活動と学習材が乖離しないよう、目的や必然性のある読みを児童に行わせていく。指導事項を焦点化し、単元を通して一貫した言語活動を位置づけることは大きな指導効果を生み出す。言語活動を行う過程が、児童にとっての課題解決の過程となるため、児童は目的を明確にし、見通しを持って学習を進めていくことができる。また、児童から「やってみたい。」「やりがいがある。」という思いを引き出せるような、魅力ある言語活動の設定が、児童の学ぶ意欲を高めることができると考える。

(3) 自己の学びを振り返る

児童が、本時及び単元を通じたふり返りにおいて、学習課題に沿ってふり返ることは、自己の学びを自覚することにつながり、主体的に学習に取り組めることにつながると考える。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価では、①粘り強い取組を行おうとする側面と②自らの学習を調整しようとする側面の双方の側面を一体的に見取ることが想定されている。特に、②自らの学習を調整するためには、学習を進める中でその都度ふり返りを行う必要がある。

児童が主体的に学習に取り組んでいるかを評価するためには、教師は、単元の中で身につけさせたい「資質・能力」が確かに身についているのか、児童自身の学びや変容を自覚できる場面を意図的に設定する必要がある。また、児童自身も、「どのように学んできたのか」「どのような力を身につけたのか」という視点を持ってふり返ることができれば、次の単元においてもそのふり返りを生かすことができると考える。児童が何をふり返ればいいのかという明確な視点を持つためにも、教師と児童が《学習課題》の共有しておくことが必要と考える。

4　研究の目標

児童の学ぶ意欲を高める手立ての工夫を通して、主体的に学ぶ児童を育てる指導の在り方を探究する。

5　研究の仮説

国語科での授業づくりの中で、目指したい児童の姿を明確にした単元づくりや、児童の学ぶ意欲を育む手立てを取った授業づくりを行うことで、児童が見通しを持って学習に取り組むことができ、「主体的に学ぶ児童」を育てることができるであろう。

6　研究の内容

(1)　授業づくり

ア　目指したい児童の姿を明確にした単元づくりの工夫

イ　児童の学ぶ意欲を育む手立ての工夫

7　研究の方法

(1)　資料及び文献による理論研究

(2)　授業研究による実践研究と授業研究

(3)　講師を招聘しての理論研究を授業実践

(4)　児童の変容と分析

8　研究にかかる年間計画

月	日	曜	研究会	研究内容
4	5	月	研究推進委員会	今年度の研究概要検討
	28	木	研究推進委員会	今年度の研究概要再検討
5	12	水	全体会	今年度の研究概要説明
	19	水	授業研究会	特別支援学級公開授業①
6			グループ	2年1組低学年グループ学年授業研究会② 2年2組低学年グループ学年授業研究会③
	9	水	全体会	**指導案検討会（　年　組）**
	28	月	市教育委員会訪問	
7			グループ	年　組高学年グループ学年授業研究会④
	7	水	全体会	**全体授業研究会⑤　年　組　教諭**
8	4	水	全体会	**指導案検討会（　年　組）**
9			グループ	年　組中学年グループ学年授業研究会⑥
	15	水	全体会	全体授業研究会⑦　年　組　教諭
10				
11			グループ	5年1組グループ学年授業研究会⑧ 5年2組グループ学年授業研究会⑨
12	8	水	全体会	**指導案検討会（1年2組）**
			グループ	年　組中学年グループ学年授業研究会⑩ 　年　組中学年グループ学年授業研究会⑪
1			グループ	1年1組グループ学年授業研究会⑫
	26	水	全体会	**全体授業研究会⑬　1年2組　森永　千晴教諭**
2		水	全体会	学習状況調査結果分析研修会
			研究推進委員会	次年度の校内研究構想検討
		水	全体会	次年度の校内研究構想提案
3		水	全体会	次年度の校内研究構想確認